

りあるなれば、松樹のこと、はなし難からめなど、あはめいふ者もあめれど、蝦夷には松なしとはいふべからず、凡闔國幹太カラフの奥までも、五葉松は殊に多く、南方には所々の山中二葉の松も少からず、決して後に移植たるものとすべからず、憶ふに松前は松の並樹など有し故の名なるべく、今外廓の壘上に喬松枝を垂れ、陰を覆ひ、青々の色を易ざるは、伊豆守慶廣慶長五年、丘阜を刪夷し、營砦を構成せし當初、其已前より有し嶺松を、其ま、殘し置たる遺像なるべし、凡山に据る城堡の制は、必從前所在の喬樹をこそ蔽蔽ともなさめ、新に矮木など植べきにあらず、故に今の松は、千載不拔の根幹也といふ也けり、前は國の表となる所には、いつも名づくる例也、抑松前の名は、いづれの時よりか書にも見へ、言にも傳しか詳ならねども、尙時若狹武田の末葉太郎信廣此國に渡り、五代伊豆守慶廣、慶長四年、始て松前と稱號を改しなれば、所こそ多けれ、松前は殊に名に顯れし故にこそしかいひしならめ、中略松前は南西の海邊、往古渡島の阜頭にて、津輕外ヶ濱に近接の地なれば、津輕の蝦夷の航海來復も繁く、白神の蝦夷なども、多く此境に蔓衍棲居せしなるべし、且本邦も蝦夷も、上古國の開くる初は、西より起りしとみへ、海路も早く通せしなるべし、上國カキクニの近郷は、却て優れる所有を以て、松前に先だちて開ぬ、松前は海角にて、大府を開べきの利なき故に、白雉の比、安倍紀氏、飽田淳代より航海して、其地を廣視し、遂に東を經略して、後方羊蹄府の擧も有しなるべし、文治中、源義經の航渡せしといふも、三厩より松前へ越て、直に東へ赴き、嘉吉中に、下國安東太の越しも、小泊より松前へ絶りて、東茂別に城し、其他渡黨の人皆多是、東に館し、蠣崎季繁は上國に壘す、享徳中、松前の始祖武田太郎信廣は、南部大畑より艦を解たれど、松前に著ぬることは、照然たり、然れども、其始一年許は、甚窮約せしといふ傳もあるは、其地航海阜頭なれども、誰も能く居館を營し、土豪と云べき人も居らざりしを、否ざれば、假令貨賄器用こそ欠乏の時にはありけめ、館主豪族など居るならば、いかで信廣當頭主人と頼まざるべ